

# 中国都市化における城中村とカトリック教

## —山西省太原市を例に—

DUAN YU(北海道大学)

### 1. 研究背景

現代社会における宗教倫理や宗教団体は一般の人々の他者や社会に対する信頼を高め、社会事業を展開し、ソーシャルキャピタルを構築する可能性が注目されている(櫻井, 2012:6-7)。それに対して、中国の急速な都市化は、地域・階層の移動に伴う地域間・階層間の格差を生み出し、社会的・精神的剥奪感を高めておく可能性があるため、社会関係の創出・維持・発展に極めて重要な意味がある。そこで、本稿では中国の急速な都市化を背景に生じた新たな村落形態—城中村とカトリック教会を取り上げ、現代中国社会における宗教団体が生み出しソーシャルキャピタルを考察する。

城中村は、地理的に都市の内部に位置する農村が、周囲の都市部から影響で、住民が都市的ライフスタイルへの適応を余儀なくされている行政区画であり、1990年代以降に大、中都市にみられるようになった農村的要素と都市的要素の混合した地域社会である(連, 2016:2)。城中村は、2006年時点で国内に5万箇所あり、5千万人が住んでいる。多数の大都市においてその面積が市街地総面積の10%~25%を、人口は都市総人口の25%~30%を占めている(孫・城所・大西, 2011:469)。村が城中村へと転換されていく過程の中では、土地所有権の問題・村民の生存と発展の問題・人間関係の対処などの問題が発生していた。そして、この問題が社会の不安定な要素となっている。城中村ではこれらの問題解決が中国社会の重要な課題となっている。

それに対して、中国における90%のカトリック教会は農村地域に位置し、カトリック教会が中国農村の社会道徳と倫理に一定の規範機能を果たしてきたので、都市部に先んじてカトリック教の成長が見られている(孫, 2011:32)。そこで、城中村の問題に対するカトリック教の役割を検討する可能性があると考えられる。

### 2. 先行研究についての検討

パットナムは、ソーシャルキャピタルが指し示しているのは個人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範である(パットナム, 2006:14)。また、片岡は、互酬性や信頼という価値は、社会的な協調行動や利他的行動を生み出し、人々を結ぶ付け、好循環なネットワークとして機能することを促進するものである。互酬性や信頼は目に見えないが、ネットワークの潤滑油であり、人々を相互に結び付ける重要な心的作用なのである(片岡, 2014:138)。こうした指摘は当然カトリック教会にも当てはまる。

Lozada(2001)は、広東省の農村地域ではカトリック教会の建設、宗教儀礼、結婚式、葬式、道路建設など具体的な生活場面の調査を通して、共同したカトリック教信仰やアイデンティティによって形成された規範や倫理が、村ではネットワーク、信頼性、互酬性の大きな基盤となりつつあるが報告している。また、山西省と河北省の農村のカトリック教会について考察した孫(2011)の研究によると、村ではカトリック教会による日常活動は、伝統的な血縁の枠組みを乗り越えて、一般村民を取り込ん

でいるので、村民たちに精神的支えを提供し、社会統合を促進し、社会的安定を維持する役割を果たしているが指摘されている。従って、宗教団体に参加することによって、人々の間でソーシャルキャピタルを得ることが可能となる。また、宗教の理念に支えられた互酬性・信頼性は、身近な他者への相互扶助の意識となり、それが広がるにつれて、社会統合の堅固な土台を提供することができると考えられる。

また、山岸は、安定したコミットメント関係の中では、相手が信頼できるかどうかを心配する必要がないわけである。そのため、社会的不確実性の存在する社会的環境に直面した人々は、しばしば社会的な不確実性を減少させ、互いに安心していられるコミットメント開発を自発的に形成しようとする(山岸, 1998:76)。しかし、都市化の過程における城中村の人々は生存手段としての土地を失い、経済活動は個人化しつつあり、異なる地域への移住が増加したことで親族・地域組織への依存が弱体化している。また、伝統的家族や地域共同体のくびきから解放され、従来の村を統合する血縁と地縁が揺るがされつつあり、規範意識や秩序原則も喪失するという大きな社会変動に直面している。前述したように、社会的な不確実性のある社会で、信頼はその言葉の意味を発揮し、新たなコミットメントを開発する動きとなると示すのである。

そこで、経済活動・人間関係・社会構造などに引き続き大きな変動を迎えている城中村のカトリック教会はどういう取り組みを通して、人々との互酬性や信頼関係を築いているのか、ソーシャルキャピタルを形成しているのかを検討したい。

### 3. 調査内容

#### 3-1 調査方法および調査対象者

調査方法は、参与観察と聞き取りである。まず、カトリック教会の長老に教会の歴史や現状について話を聞いた。長老は、長年 A 村に在住しており、村や教会の事情について詳しい人物である。また、カトリック教会の聖職者(主任司祭や神父)へのインタビューを行った。聖職者に A 教会の組織構造、信者の構成について話を聞いた。さらに、教会を考察する時に、礼拝活動に参加する信者たちを選び、半構造化面接を行った。主な質問のトピックは、城中村に転換される過程では関心事及びカトリックの影響という二つの方面である。

#### 3-2 A 教会の歴史と現状

1870 年にフランシスコ会を所属するイタリア人宣教師艾士杰は、A 教会を成立した。当時、教会は養護施設を設けて女兒や老人に食べ物と住居を提供した。また、教堂で識字班を設置運営することによって、信者たちの識字率が高まるようになった。民国時代では、教会は、老人ホーム、養護施設が建設され、当時では珍しい小学校も備えた。

中華人民共和国成立以降教会は、政府が公認する「中国天主教友愛国会」に組み入れられている。しかし、1951 年に A 教会における三自革新と反三自革新間の闘争より集団抗議事件が生じた。1957 年から社会主義教育運動より、全ての教会活動が停止された。文化大革命で教会の講堂は紅衛兵によって破壊され、養護施設も取り壊された。1982 年に宗教復興政策が掲げられ、教会が「中国天主教主教団」を加入して、宗教活動が再開された。没収された土地を返還させ、若者たちが聖職に身を捧げ、新しい神父や修道女が大勢誕生した。現在教会は、主任司祭一名、神父一名、修道女三名、長老一名

があり、カトリック信者 1900 人いる。

A 教会の管理機関は教会管理委員会と呼ばれ、成員が主任司祭、神父、長老で構成されている。また、教会管理委員会下では、青少年教養組・伝統行事開催組・訪問組・財産管理組・祈禱組という五つの工作部を設置する。かつ、教会管理委員会は五つの工作部を管理し、教会の日常活動を指導する。主任司祭は、教会管理委員会の委員長を担当し、教会に関するすべての事項を討議または決定するために委員会議を招集する役を務める。また、神父は、伝統行事開催組・祈禱組・訪問組という三つの工作部の日常仕事を責任する。長老は、青少年教養組・財産管理組という二つの工作部の日常仕事を責任する。

### 3-3 A 教会が生み出すソーシャルキャピタル

A 教会は主に上記の五つの工作部を通して、ソーシャルキャピタルという役割を發揮している。まず、青少年教養組の仕事は、毎年の夏休みに教会における 6～12 歳の子供信者を対象としてカトリック教知識を普及する活動を行うことである。授業の先生は A 教会の神職員が担当する。こうした教養活動は、38 年の歴史を有し、カトリック信仰を伝承する重要な手段となっている。教会は青少年教養組を通じて、信者たちが子どもの時からカトリック信仰を培い、共同したカトリック的世界観やアイデンティティを形成することができる。

また、伝統行事開催組の仕事は、主日礼拝、祝日崇拝といった行事を展開する前の事前準備活動を行うことである。具体的には、信者たちへの連絡、供え物の準備、教会堂の清掃、合唱団の集合、外来聖職者の招待である。そういった活動を通して、伝統行事や日曜日礼拝の時期に出稼ぎ労働者やほかの地域の移住者は教会の活動に参加することができるし、皆の交流の場を提供することができる。

さらに、訪問組の仕事は、教会がすべての信者たちの信仰状況を把握するために、毎週の土曜日に 20 名の洗礼する信者たちが、信者たちの家を訪問することである。具体的には、20 名の信者は 10 個の組を分けて、異なる地域に住んでいる信者たちを訪れ、彼らの困難を傾聴した後、祈禱組と財産管理組を報告して手を助けることがある。教会は訪問組を通して、上や下年代の人とコミュニケーションをするようになり、共通する関心事を持つことができる。

祈禱組の仕事は、訪問組の報告を受けた後毎週の金曜日の夜に病気や貧困が直面している信者に対する祈禱会を行い、信者たちの力を合わせて、当事者の苦痛が赦されるよう神様に祈ることである。祈禱組は困難が直面している信者たちに精神的救済を与える。また、毎週の金曜日の夜には、出稼ぎ労働者や移住者は余裕な時間があるため、教会に行って祈禱会に参加することができるし、皆が自分の苦痛や関心事を話す居場所を提供する。

財産管理組の仕事は、信者たちに奉仕する献金を管理することである。毎年の 12 月に、財産管理組は教会管理委員会に昨年度の献金の使途と、今年度の献金の利用用途の報告を行った。具体的には、教会の修繕費、供え物の購入費、祝日崇拝活動の開催費用、貧困や病気になる信者たちへの救済費用があげられる。例えば、教会は孤児を扶養することがあり、現在でも 4 人の孤児を引き取っている。そのうち、二人が小学生、二人が保育園児である。また、教会では高齢者や障害者向けの施設も整備されている。また、スタッフは全員がカトリック信者で、リーダーは神父と修道女である。

## 4. 調査結果

第一に、利他的精神の養成は、村では補償金の分配問題や土地失った人の生計維持などの問題に対

して役割を持つ。城中村では土地収用に伴い、大量の金銭補償が生じている。それに伴い、隣人間・家族内における親子・きょうだい間でどのように補償金を分配するのかということについて、矛盾が発生し人間関係が悪くなるリスクがある。信者たちはキリスト教の教義を遵守し土地の所有権をめぐり、できる限り合理的な範囲で自分の権利を守り、自分に属さない土地や財産に関しては争わない。生計を立てるのが困難な信者に金銭や仕事の提供などを行い助けることがある。それは、A カトリック教会は五つの工作部を通し、家族内・教会内という異なる場所と信者たち・神父など様々な人々によって、相互に影響し合いながら、利他的な精神を他者へ伝え、陶冶して養成することがあり、信者たちに相互扶助・救済・隣人愛・禁欲などの利他主義という教義を提供することで、信者たちの親孝行や財産の均分などの道徳規範を養成し、秩序原則も維持することが可能だと見られる。つまり、信者たちは直接何か返ってくることは期待しないし、いずれはあなたか誰か他の人がお返しをしてくれることを信じ、今これをあなたのためにしてあげるという互酬性の規範を養成する。

第二に、A 教会は信者たちを統合する役割を持つことが示唆された。出稼ぎ労働者の増加や異なる地域へと移住していくので、人々のつながりが弱まったリスクがある。しかし、A 教会は、伝統行事開催組を通して、礼拝環境の改善、教会の保存、主日礼拝の開催、教養活動の展開などの活動を通じて信者たちの信仰生活が維持されている。この信仰活動が信者たちの日常生活に及んでいる。具体的には、A 教会は五つの工作部を通して、信者たちが同じ信仰と世界観に基づいた強い絆で繋がっている。そしてその信仰が信頼・互酬性の基盤となっており、信者たちが共にする活動への参加などを促し、様々な人となつがる源泉ともなりうる。つまり、教会内の信者たち間のネットワークとカトリック教への信仰が結びつき、社会統合と互助が促される。信頼関係・互酬性・規範意識を伴うネットワークに包摂されると考えられる。

最後は今後の課題である。本研究では、カトリック教会と地域の一般住民の間にどのような関係があるのかという点についてはいまだに不十分である。それに対して、ソーシャルキャピタルが、一教団としての排他性、閉鎖性を乗り越えて、教団外部の人に利他的・信頼性・相互扶助などの倫理観を伝えていく可能性を検討する必要があると思われる。そのため今後の研究では、地域社会の一般住民とカトリック教会の関係を具体的な事件を通じて検討する必要があると思われる。

## 参考文献

- 片岡 えみ, 2014, 「信頼感とソーシャルキャピタル、寛容性」, 『駒沢大学文学部研究紀要』(72).
- 山岸 俊男, 1998, 『信頼の構造—こころ社会の進化ゲーム』, 東京大学出版会.
- ロバート・バットナム, 2006, 『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生』柴内康文訳, 柏書房.
- Lozada, E. P. J r. 2001, “*God Aboveground: Catholic Church, Postsocialist State, and Transnational Processes in a Chinese.*” Village California :Stanford University Press.
- 連 興楨, 2016, 「中国における都市化と「城中村」の開発：深「セン」の都市部を中心として」, 『海港都市研究』11:3-19.
- 孫 琥璠編, 2011, 『当代中国天主教本土化研究—太原教区与石家莊教区為例』, 民族出版会. (中国語)
- 櫻井 義秀・濱田陽編, 2012, 『アジアの宗教とソーシャルキャピタル』, 明石書店.
- 孫 立・大西 隆・城所 哲夫, 2011, 「中国都市における城中村再開発の実態に関する一考察—中国西安市を事例として」, 『都市計画論文集』46(3):469—474.